

山の手の子

水上瀧太郎

青空文庫

お屋敷の子と生まれた悲^{かな}哀^{しみ}を、しみじみと知り初^そめたのはいつからであつたらう。

ひとひ

一日一日と限りなき喜^{よろこ}悦^びに満ちた世界に近づいて行くのだと、

未来を待った少年の若々しい心も、時の進^{すす}行^みにつれていつかしら、

何気なく過ぎて来た帰らぬ昨日^{きのう}に、身も魂も投げ出して追憶の甘

き愁^{うれ}いに耽^{ふけ}りたいというはかない慰^{なぐさ}藉^めを弄^{もて}ぶようになってから、

私は私にいつもこう尋ねるのであつた。

山の手の高台もやがて尽きようというだらだら坂をちようど登りきつた角屋敷の黒門の中に生まれた私は、幼^{いとけ}き日の自分をその黒門と切り離して想^{おも}い起すことは出来ない。私の家を終りとして

丘の上は屋敷門の薄暗い底には何物か潜んでいるように、牢獄ひとやの
ような大きな構造かまえの家が厳めしい堀へいを連ねて、どこの家でも広く
取り囲んだ庭には鬱うつそう蒼そうと茂った樹木の間には春は梅、桜、桃、李すもも
が咲き揃そろつて、風の吹く日にはどこの家の梢こずえから散るのか見も知
らぬいろいろの花が庭に散り敷いた。そればかりではない、もう
二十年も前にその丘を去った私の幼い心にも深く沁しみ込んで忘れ
られないのは、寂然ひっそりした屋敷屋敷から、花のころ月の宵よいなどに
は申し合わせたように単調ものうな懶い、古びた琴の音が洩もれ聞えて淋さび
しい涙を誘うのであった。私はこうした丘の上に生まれた。静寂しずか
な重苦しい陰鬱なこの丘の端はすれから狭いだらだら坂を下ると、カ
ラリと四圍あたりの空気は変つてせせこましい、軒の低い家ばかりの場

末の町が帯のように繁華な下町の真中へと続いていった。

今も静かに眼を閉じて昔を描けば、坂の両側の小さな、つつま
しやかな商家がとびとびながらも瞭然と浮んで来る。赤々と禿
げた、肥つた翁が丸い鉄火鉢を膝子のように抱いて、睡たそ
うに店番をしていた唐物屋は、長崎屋と言った。そのころの人
々にはまだ見馴れなかつた西洋の帽子や、肩掛けや、リボンや、
いろいろの派手な色彩を掛け連ねた店は子供の眼にはむしろ不可
思議に映った。その店で私は、動物、植物あるいはまた滑稽人形
の絵を切つて湯に浮かせ、つぶつぶと紙面に汗をかくのを待つて
白紙しらかみに押し付けると、その獣や花や人の絵が奇麗に映る西洋押
絵というものを買いに行つた。

「坊ちゃん。今度はメリケンから上等舶来の押絵が参りましたよ」

と禿頭はガラスだな玻璃棚からクルクルと巻いたのを出しては店先にひろ拡

げた。子供には想像もつかない遠い遠いメリケンから海を渡つて

来た奇妙な慰藉品なぐさめを私はどんなに憧あこがれ憬をもつて見たろう。油絵

で見るような天使が大きな白鳥と遊んでいるありとあらゆる美し

い花はなとり鳥を集めた異国を想像してどんなに懐なつかしみ焦がれたろう。

実際あり来たりの独楽こま、凧たこ、太鼓、そんな物に飽きたお屋敷の子

は珍めづらしもの物好きの心から烈はげしい異国趣味に陥つて何でも上等舶来

と言われなければ喜ばなかった。長崎屋の筋向うの玩おもちゃ具屋の、

私はいい花おとく客いだった。洋刀サアベル、喇叭らっぱ、鉄砲を肩に、腰にした坊

ちゃんの勇ましい姿を坂下の子らはどんなに羨うらやましく妬ねたましく見

送つたろう。いつだったか父^{ちちはは}母^{はは}が旅中お祖母様^{ばあ}とお留守居^{くしゅ}の御^ご褒^{ほう}美^びに西洋木馬^{せいやうぼま}を買つていただいたのもその家であった。白斑^{はくち}の大きな木馬^{くま}の鞍^{くら}の上に小さい主人^{しゅじん}が、両足^{りやうあし}を踏^ふん張^はつて跨^{また}がると、白い房^ふ々^{たて}した鬣^{がみ}を動かして馬^{うま}は前後^{ぜんご}に揺^ゆれるのだった。

「マア、玩具^{あそび}にまで何両^{なにりやう}という品^{しな}が出来^{でき}るのですかねえ、今時^{いまとき}の子供^{こども}は幸^{しあ}福^{あわせ}ですなえ」

とお祖母様^{ばあ}はニコニコして見ていらつしやつた。玩具屋^{あそびや}の側^{かた}を次第^{しだい}に下^{くだ}つて行くと坂^{さか}の下^{した}には絵^え双紙屋^{ふたじや}があつた。この店^{みせ}には千代紙^{ちよじ}を買^かいに行くと、私の姉^{あね}のお河童^{かづな}さんの姿^{すがた}もしばしば見^みえた。芳^{よし}年^{とし}の三十六怪選^{さんじゅうろくかいせん}の勇^{ゆう}ましくも物恐^{ものおそ}ろしい妖怪^{ようかい}変化^{へんげ}の絵^えや、三枚^{さんまい}続^{つづ}きの武者^{むしゃ}絵^えに、乳母^{うば}や女中^{にようぢゆう}に手^てを曳^ひかれた坊^{ぼく}ちゃん^{ちゃん}の足^{あし}は

幾度もその前で動かなくなつた。なかにも忘れられないのは古い錦にしきえ絵で、誰の筆か滝夜叉姫たきやしやひめの一枚絵。私が誕生日の祝い物に何が欲ほしいと聞かれて、あれと答えたので散歩がてらに父に連れられて行つた時「これは売物ではございません」とむずかしい顔の亭主ていしゆが言つてから亭主を憎いと思うよりも一層姫の美しい姿絵が懐かしくなつた。その他そこらには呉服屋、陶器屋せともの、葉茶屋、なぞがあつたようだが私はそれらについて懐かしい何の思い出もない。坂下もまた絵双紙屋の側の熊野神社くまの、それと向い合つた柳の木に軒燈の隠れた小さな煙草屋たばこのほかはやはり記憶から消えてしまつたけれどもその小さな煙草屋の玻璃棚が並べられて、わずかに板敷を残した店先に、私の幼いとけなかつた姿が瞭然はつきりと佇たたずむの

である。

私の生まれた黒門の内は、家も庭もじめじめと暗かった。さる旗本の古屋敷で、往来から見ても塀の上に蒼あおくろ黒い樹木の茂りが家を隠していた。かなり広い庭も、大木が造る影にすっかり苔蒸こけむして日中も夜のようにだった。それでもさすがに春は植込みの花の木が思いがけない庭の隅すみすみ々にも咲いたけれど、やがて五月雨さみだれのころにでもなろうものなら絶え間なく降る雨はしとしと苔に沁みて一日や二日からりと晴れても乾かわくことではなく、だだっ広い家の踏めばぶよぶよと海のように思われる室へやへや々の畳の上に蛞蝓なめくじの落ちて匍はうようなことも多かった。物心つくころから私はこの

陰気な家を嫌きらった。そして時たま乳母の背に負われて黒門を出る機会おりがあると坂下のカラカラに乾ききった往来で、独楽廻しやメロンコをする町の子を見て、自分も乳母の手を離れて、あんなに多お勢おせいの友達と一緒に遊びたいと思う心を強くするのみであつた。乳母は、

「町つ子とお遊びになつてはいけません」

と瘦やせた蒼白い顔をことさら真面目まじめにして誠いましめた。なぜということとはなしに私は町つ子と遊んではいけないものだと思つていほど幼なかつた。そのころ私は毎晩母の懐ふところに抱かれて、竹取の翁おきなが見つけた小さいお姫様や、継母まははにいじめられる可哀かわいそうな落お窪ちくぼのお話を他人事ひとごととは思わずに身にしみて、時には涙を溢こぼして

聞きながらいつかしら寝入るのであったがある晩から私は乳母に添い寝されるようになった。

「もうじき赤さんがお生まれになると、新様しんさまはお兄いさんにおなりになるのですから、お母様に甘ったれていらつしやつてはいけません」

と言い聞かされて、私は小さい赤坊あかんぼの兄になるのを嬉うれしくは思ったが母の懐に別れなければならぬことの悲しさに涙ぐまれて冷たい乳母の胸に顔を押し当てた。

間もなく母は寢所を出ない身となった。家内の者は何かしら気き忙せわしそうに、物言いも声を潜めるようになり相手をしてくれることもなくなつた。私の乳母さえも年役に、若い女のともすれば騒

ぎたがるのを叱りながらそわそわ立ち働いていて私をば顧みるこ
とが少なくなつた。出産の準備したくに混乱した家の中で私は孤独ひとりをつ
くづく淋しいと思つた。お祖母様のお氣に入りで夜も廊下続きの
隠居所に寝る姉も、そのころ習い初めた琴を弾くことさえ止めら
れて、一人で人形を抱かかえては、遊び相手を欲しがつて常は瘡かんしゃ
癩くを恐れて避けている弟をもお祖母様の傍そばに呼んで飯事ままごとの旦だ
那んな様にするのであつたが、それもじきと私の方で飽きが来てふと
したことから腕白いたずらざかが出ては姉を泣かすのでお祖母様や乳母に叱ら
れる種となつた。腕白盛りの坊ちゃんはは「静かにしていらつし
やい」と言われて人氣の少ない、室の片隅に手遊品てあそびを並べてもし
ばらく経つと厭いやになつて忙しい人々に相手を求めるので「ちつと

お庭にでも出てお遊びなさい」と家の内から追い立てられる。

黒土の上に透き間もない苔は木立の間に形ばかり付いていた小道をも埋めて踏めばじとじとと音もなく水の湧き出る小暗い庭は、話に聞きたいいろいろの恐ろしい物の住家のように思われ、自由に遊び廻る気にはなれないので縁近いところでつまらなくすくんでいた。けれども次第に馴れて来るとまだ見ぬ庭の木立の奥が何となく心を引くので、恐々ながらも幾年か箒目も入らずに朽敗した落葉を踏んでは、未知の国土を探究する冒険家のように、不安と好奇心で日に日に少しずつ繁った枝を潜り潜り奥深く進み入るようになった。手入れをしない古庭は植物の朽ちた匂いが充ちていた。数知れぬ羽虫は到るところに影のように飛んでいた。森

閑として木下このしたやみ闇に枯葉を踏む自分の足音が幾度か耳を脅かした。蜘蛛くもの巣に顔を包まれては土蜘蛛の精を思い出して逃げかえった。しかしこうして踏み馴れた道を知らず知らずに造って私はついにわが家の庭の奥底を究めたのであった。暗緑のしめつぽい木立を抜けるとカラリと晴れた日を充分いっぱいに受けて、そこはまばらに結たった竹垣たけがきもいつか倒れてはいたが垣の外は打ち立てたような崖がけで、眼の下には坂下の町の屋根が遠くまで昼の光の中に連なっている。その果てに品川の海が真蒼まっさおに輝いていた。今まで思いもかけなかった眼新しい、広い景色を自分一人の力で見出した嬉しさに私は雨さえ降らなければ毎日一度は必ず崖の上に小さい姿を現わすようになった。そして馴れるに従って日一日と何かしら珍

しい物を発見した。熊野神社の大鳥居も見えた。三吉座みよしぎという小芝居の白壁に幾筋かの鼻負ひいきのぼり幟が風に吹かれているのを、一様に黒い屋根の間に見出した時はことに嬉しかった。芝居好きの車夫とうじろうの藤次郎が父の役所の休日やすみには私の守りもをしながら、「乳母ばあやには秘密ないしよですぜ」

と言つては肩車に乗せてその三吉座の立見に連れて行く。父母とともに行く歌舞伎座かぶきざや新富座ひんぷの緋毛氈ひもうせんの美しい棧敷さじきとは打つて変つて薄暗い鉄格子てつこうしの中から人の頭を越して覗のぞいたケレンだくさんの小芝居の舞台は子供の目にはかえつて不思議に面白かつた。ことに大向うと言わず土間も棧敷いっせいも一いっせいに鼻負ひいき鼻負ひいきの名を呼び立てて、もしか敵かたきやく役やくでも出ようものなら熱誠を籠こめた怒ど

罵ばの聲が場内に充満いっばいになる不秩序な賑にぎやかさが心も躍おどるように思わせたのに違ちがいない。私は藤次郎の言うままに乳母には隠れてたびたび連れて行ってもらったものだった。静寂な木立を後にして崖の上に立っていると芝居の内部の鳴物の音ねが瞭然はつきりと耳に響くように思われてあの坂下の賑にぎわいの中に飛んで行きたいほど一人ぼっちの自分がうら淋しく思われた。

それは確かに早春のことであつた。日ごとに一人で訪ずれる崖には一夜のうちに著しく延びて緑を増す雑草の中に見る限りいたいた草の花が咲いていた。その草の中にスクスクと抜け出た虎すかん杖ぼを取るために崖下に打ち続く裏長屋の子供らが、嶮けわしい崖の

草の中をがさがさあさつていた。小汚こぎたない服装みなりをした鼻垂はなたらしではあつたが犬のように軽快な身のこなしで、群れを作つてほしいままに遊び廻つてるのが遊び相手のない私にはどんなに懐かしくも羨ましく思われたろう。足の下を覗くように崖端がけはたへ出て、自分が一人ぼっちで立つていることを子供らに知ってもらいたいと思つたがこちらから声をかけるほどの勇氣もなかつた。全く違つた国を見るように一挙一動の掛け放れた彼らと、自分も同じように振舞いたいと思つて手の届くところに生はえている虎杖すかんぼを力いっばい充分いっばいに抜いて、子供たちのするように青い柔かい茎を噛かんでも見た。しくしくと冷めたい酸すっぱい草の汁しるが虫歯の虚孔うろに沁み入つた。

こうしたはかない子供心の遣瀬やるせなさを感じながら日ごと同じ場所
所に立つお屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて
長屋の子らが崖下から認めたまでは、どうにかして、自分の存
在を彼らに知らせようとする瓦かわらを積んでは崩くずすような取り止めも
ない謀略はかりごとが幼い胸中に幾度か徒事あだに廻めぐらされたのであったが
とうとう何の手段てだてをも自分からすることなくある日崖下の子の一
人が私を見つけてくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私
を見るとさもびっくりしたような顔をして仲間の者にひそひそと
ささやく気配だった。かさかさ草の中を潜っていた子供の顔は人
馴れぬ獣のように疑い深い眼つきで一様に私を仰ぎ見た。

その翌日。もう長屋の子と友達になったような気がして、いつ

もよりも勇んで私は崖に立つて待つていた。やがてがやがや列を作つてやつて来た子供たちも私の姿を見て怪しまなかつた。

「坊ちゃん、お遊びな」

と軽く節をつけて昨日私を見つけた子が馴れ馴れしく呼んだ。私は何と答えていいのかわからなかつた。「町つ子と遊んではいけません」と言つた乳母の言葉を想い起して何か大きな悪いことをしてしまつたように心を痛めた。それでも、

「坊ちゃんおいでよ」

と気軽に呼ぶ子供に誘われて、つい一言二言は口返えしをするようになったが悪戯いたづらっこ子も、さすがに高い崖を攀よじ登つて来ることは出来ないので大きな声で呼び交かわすよりしかたがなかつた。

こんな日が続いたある日、崖上の私を初めて発見した魚屋の金ちゃん、は表門から町へ出て来いという知恵を私に与えた。しばらくは不安心に思い迷ったが遊びたい一心から産婆や看護婦にまじって乳母も女中たちも産所に足を運んでいる最中を私の小さな姿は黒門を忍び出たのである。かつて一度も人手を離れて家の外を歩いたことのなかつた私は、烈しい車馬の往来が危なつかしくて、せつかく出た門の柱に噛り付いて不可思議な世間の活動を、病な眼で見ているのであった。

麗らかな春の昼は、勢いよく坂を馳け下って行く俵の輪があげる軽塵にも知られた。目まぐるしい坂下の町をしばらく眺めると天から地から満ち溢れた日光の中を影法師のような一隊が

横町から現われて坂を上つて来た。

「坊ちゃんお遊びな」

と遠くから声を揃えて迎いに来た町っ子を近々と見た時私は思わず門内に馳け込んでしまった。汚きたならしい着物の、埃ほこりまみれの顔の、眼ばかり光る鼻垂らしはてんでに棒切れを持っていた。

「坊ちゃん、おいでな皆みんなで遊ぶからよ」

中では一番年とし増かさの金ちゃんしりきは尻切れ草履ぞうりを引きずつて門もん柱らに手を掛けながら扉とびらの陰にかくれて恐々覗いている私を誘つた。坊ちゃんの小さい姿は町っ子の群れに取り巻かれて坂を下つた。

間もなく私は兄になった。その当座の混雑は、私をして自由に町つ子となる機会を与えた。あるいは邪魔者のいない方がかかる折には結句いいと思つて家の者は知つても黙つていたのかも知れない。

比較的に気の弱いお屋敷の子は荒々しい町つ子に混つて負を取らないで遊ぶことは出来なかつたが彼らは物珍しがつて私をばちやほやする。私はまた何をしても敵いかなそうもない喧嘩けんか早い子供たちを恐いとは思いつつも窮屈な陰気な家にいるよりも誰に咎とがめられることもなく気儘きままに土の上を馳け廻るのが面白くて、遊びに疲れた別れ際ぎわに「明日あしたもきつとおいで」と言われるままに日ごとにその群れに加わつた。

私たちの遊び場となつたのは熊野神社の境内と柳屋という煙草屋の店先とであつた。柳屋の店にはいつでも若い娘が坐つていた。何という名だつたか忘れてしまつたけれども色白の肥つた優しい女だつた。私は柳屋の娘というと黄縞きしまに黒襟くろえりで赤い帯を年が年中していたように印象されている。弟の清せいちゃんちゃんは私が一番の仲よしで町ツ子の群れのうちでは小ぎつぱりした服装なりをしていた。そして私と清ちゃんちゃんが年も背丈も誰よりも小さかつた。柳屋の姉き
弟ようだいにはお母つかさんがなく病身のお父とつさんが、いつでも奥せきで咳せきをしていた。店先には夏と限らずに縁台が出してあつたもので、私たちがばかりか近所の店の息子や小僧が面白ずくの煙草をふかしな
がら騒いでいた。

「あいつらは清ちゃんの姉さんを張りに来てやがるんだよ」

と言う金ちゃんの言葉の意味はわからぬながらも私は娘のために心を配わづらわした。けれどもはかない私の思い出の中心となるのはこの柳屋の娘ではなかった。

都もやがて高台の花は風もないのに散り尽すころであつた。あの日はいつもの通り黒門を出て坂を小走りに駆け下つた。その日に限つて私より先には誰も出て来ていないので、私はしばらく待つつもりで柳屋の縁台に腰かけた。店番の人も見えなかつたがほどなく清ちゃんが奥から駆け出して来る。続いて清ちゃんの姉さんも出て来て、

「オヤ、坊ちゃん一人ツきり」

と言いながら私の傍に坐つた。派手な着物を着て桜の花はな簪かんざしをさしていた。私の頬ほおにすれずれの顔には白粉おしろいが濃かつた。

「今日は皆遊びに来ないのかい」

「エエ、町内のお花見で皆で向島に行くの。だから坊ちゃんはまだ明日遊びにおいで」

娘は諭さとすように私の顔を覗き込んだ。

間もなく「今日はこんち」と仇あだつぽい声を先にして横町から町内の人

たちだろう、若い衆や娘がまじつて金ちゃんも鉄公も千吉ききょうも今日は泥どろの付かない着物を着て出て来た。三味線さんまいせんを担かついだ男もいた。

「アラ、今ちようど出かけようと思つていたとこなの。どうもわ

ざわざ誘つていただいて済みません」

清ちゃん姉さんはいそいそと立ち上つた。私は人々に顔を見られるのが気まり悪くてもじもじしていた。

「どうも扮装おつくりに手間がとれまして困ります。サア出かけようじやあがあせんか」

と赤い手拭てぬぐいを四角に畳んで禿頭に載せたじじいが剽ひょうきん軽な声を出したので皆一度に吹き出した。

「厭おじな小父さんねえ」

と柳屋の娘は袂たもとを振り上げてちよつと睨にらんだ。

どやどやと歩き出す人々にまじった娘は「明日おいで」と言つて私を振り向いた。

「坊ちゃんが行かないのかい、一緒においでよ」

と金ちゃんが叫んだけれども誰も何とも言ってくれぬ人はなかつた。私は埃を上げてさんざめかして行く後姿を淋しく見送つてみると、人々の一番後に残つて、柳屋の娘と何かささやき合つていた、さつき「今日は」と真先に立つて来た娘がしげしげと私を振りかえつて見ていたが小戻りして不意に私を抱き上げて何も言わないで頬ずりした。驚いて見上げる私を蓮葉はすつばに眼で笑つてそのまま清ちゃんの姉さんと手を引き合つて人々の後を追つて行つた。それが金ちゃんの姉のお鶴つるだということは後で知つたが紫と白の派手な手綱染めの着物の裾すそを端折はしおツて紅の長襦袢ながじゆばんがすらりとした長い脛はぎに絡からんでいた。銀杏返いちようがえしに大きな桜の花簪は清ち

やんの姉さんとお揃いで襟には色染めの桜の手拭を結んでいた姿は深く眼に残った。私は一人しょうぜん悄然と町内のお花見の連中が春の町を練って行く後姿が、町角に消えるまで立ち尽したがそれも見えなくなるとにわかに取り残された悲しさに胸が迫って来て思わず涙が浮んで来た。

多数者の中で人々とともに喜びともに狂うことも出来ない淋しい孤独の生活を送る私の一生はお屋敷の子と生まれた事実から切り離すことの出来ない運命であつたのだ。小さな坊ちゃんちゃんの姿は一人花見連とは反対に坂を登って、やがて恨めしい黒門の中に吸われた。

珍しい玩おもちゃ具も五日十日とたつうちには投げ出されたまま顧みられなくなるように、最初のうちこそ「坊ちゃん坊ちゃん」と囃はやし立てた子供も、やがて煙草屋の店先の柳の葉も延びきったころには全く私に飽きてしまつて坊ちゃんはもはや大将としての尊敬は失われて金ちゃんの手下の一人に過ぎなかつた。

「何んでえ弱虫」

こう言つて肱ひじを張つて突つかかつて来る鼻垂らしに逆らうだけの力も味方もなかつた。けれどもやはり毎日のように遊び仲間を求めて町へ出たのは小さい妹のために家中の愛を奪われ、乳母をさえも奪われたがために家を嫌つたよりもお鶴といつた魚屋の娘に逢あいたためであつた。

子供の眼には自分より年上の人、ことに女の年齢としは全く測ることが出来ない。お鶴も柳屋の娘も私にはただ娘であつたとばかりでその年ごろを明はつきり確はつきりと言うことは思いも及ばないことに属している。お鶴は煙草屋の柳の陰の縁台の女主人公であつた。色の蒼白い背丈の割合に顔の小さい女で私は今、そのすらりとした後姿を見せて蓮葉に日ひ和より下げ駄たを鳴らして行くお鶴と、物を言わない時でも底深く漂う水のような涼しい眼を持ったお鶴とをことさら瞭はつきり然はつきりと想い出すことが出来る。

きらきらと暑い初夏の日がだらだら坂の上から真直まっすぐに流れた往来は下駄の齒がよく冴さえて響く。日に幾いくたびとなく撤みぎ水車まきぐるまが町角から現あらわれては、商家の軒下までも濡ぬらして行くが、見る

間にまた乾ききつて白埃しらほこりになつてしまふ。酒屋の軒には燕つばめの子が嘴くちばしを揃えて巢ねに啼いた。氷屋が砂漠さばくの緑地のようにわずかに涼しく眺められる。一日一日と道行く人の着物が白くなつて行く。と柳屋の縁台はいよいよ賑にぎやかになつた。派手な浴衣ゆかたのお鶴も、街ちまたに影の落ちるころきつと横町から姿を見せるのであつた。「今こ日は」と遠くから声をかけて若い衆の中でも構わずに割り込んで腰を下した。

「坊ちゃん。ここにいらつしやい」

とお鶴はいつも私をその膝ひざに抱いて後から頬ずりしながら話の中心になつていた。私はもう汗みずくになつて熊野神社の鳥居を廻つて鬼ごっこをする金ちゃんに従つて行こうとはしないで、よ

くはわからぬながらも縁台の話を聞いていた。もちろん話は近所の噂うわさで符徴まじりのものだった。「お安くないね」「御馳走ごちそうさま」というような言葉を小耳こみみに挟はさんで帰つて、乳母ははに叱なられたこともあつた。若い娘の軽い口から三吉座の評判もしばしば出た。お鶴は口癖くせのように、

「死んだと思つたお富たあ……お釈迦しゃか様でも気がつくめえ」

とちよつと済すましてやる声こわいろ色いろは「ヨウヨウ梅ちゃんそつくり」

という若者たちの囃はす中で聞かされて私も時たま人のいない庭の中などでは小声ながらも同じ文句を繰り返した。尾上梅之助という若い役者が三吉座を覗く場末の町の娘つ子をしてどんなにか胸を躍うらせたものであつたらう。藤次郎の背に乗つた私は、「色男」

「女殺し」という若者のわめきにまじる「いいわねえ」「綺麗なえ」と、感激に息も出来ない娘たちの吐息のような私語ささやきを聞き洩らさなかつた。私もいつも綺麗な男になる梅之助が好きだつたけれどあまりにお鶴がほめる時は微かすかに反感を懐いだいた。

「平生ふだんきな着馴なれた振袖ふりそでから、鬘まげも島田に由井ヶ浜、女に化けて美つつもたせ人局……。ねえ坊ちゃん。梅之助が一番でしょう」

と言つてお鶴は例のように頬を付ける。私は人前の気恥かしさに、

「梅之助なんか厭だい」

と言ふのだつた。實際連中は、お鶴がいつも私を抱いているので面白からかくによく戯弄かつた。

「お鶴さんは坊ちゃんに惚ほれてるよ」

私は何かしら真赤になつてお鶴の膝を抜け出ようとするとお鶴はわざと力を入れて抱き締める。

「そうですねえ。私の旦那様だもの。皆焼いてるんだよ」
「嘘うそだいい嘘だいい」

足をばたばたやりながら擦すり付ける頬を打とうとする、その手を取つてお鶴はチュツと音をさせて唇くちびるに吸う。

「アアア、私は坊ちゃんに嫌われてしまった」

さも落がっかり胆だんしたように言うのであつた。

やがて今日も坂上にのみ残つて薄うす明あかりも坂下から次第に暮れ初めると誰からともなく口々に、

「夕焼け小焼け、明日天気になあれ」

と子供らは歌いながらあつちこつちの横町や露路に遊び疲れた足を物の匂いにおの漂う家路へと夕餉ゆうげのために散つて行く。

「お土産みやげ三つで気が済んだ」

と背中をどやして逃げ出す素早い奴やつを追いかけてお鶴も「明日またおいで」と言つて、別れ際に今日の終りの頬擦りをして横町へ曲つて行く。

私はいつも父母の前にキッチンと坐つて、食膳しょくぜんに着くのおきてにさええ掟のある、堅苦しい家に帰るのが何だか心細く、遠ざかり行く子供の声をはかない別れのように聞きながら一人で坂を上つて黒門をはいった。夕暮は遠い空の雲にさええ取止めもない想いを走ら

せてしつとりと心もうちしめりわけもなく涙ぐまれる悲しい癖を幼い時から私は持つていた。

玄関をはいると古びた家の匂いがプンと鼻を衝く。だだっ広い家の真中に掛かる燈火の光の薄らぐ隅々には壁虫が死に絶えるような低い声で啼く。家内を歩く足音が水底のように冷めたく心の中へも響いて聞える。世間では最も楽しい時と聞く晩餐時さえ厳めしい父に習って行儀よく笑い声を聞くこともなく終了になつてしまふ音楽のない家の侘しさはまた私の心であつた。お祖母様や乳母や誰彼に聞かされたお化の話はすべてわが家にあつた出来事ではないかと夜はいつでも微かな物音にさえ愕えやすかつた。自然と私は朝を待った。町っ子の気儘な生活を羨んだ。

カラリと晴れた青空の下に物皆ものみなが動いている町へ出ると蘇よみがえ生
 ったように胸が躍つて全身の血が勢いよく廻る。早くも街まちには夏
 が漲みなぎつて白く輝く夏帽子が坂の上、下へと汗を拭き拭き消えて行
 く。ことさら暑い日中を扨えらんで菅笠すげがさを被かぶつた金魚屋が「目高、
 金魚」と焼けつくような人の耳に、涼しい水音を偲しのばせる売り声
 を競きそう後からだらりと白く乾いた舌を垂らして犬がさも肉体を持
 て余したようについて行く。夏が来た夏が来た。その夏の熊野神
 社の祭礼も忘れられない思い出の一頁ページを占めねばならぬ。

町内の表通りの家の軒にはどこも揃いの提ちようちん灯を出したが屋
 根と屋根との打ち続く坂下は奇麗に花々しく見えるのに、堀へいと堀
 とは続いて隣の家の物音さえ聞えない坂上は大きな屋敷門に提

灯の配合うつりが悪く、かえつて墓場のように淋しかった。そればかりか私の家などは祭りと言つても別段何をするのでもないのに引き替えて商家では稼業かぎようを休んでまでも店先に金屏風きんびようぶを立て廻し、緋毛氈ひもうせんを敷き、曲りくねつた遠州流の生花を飾つて客を待つ。娘たちも平生ふだんとは見違えるように奇麗に着飾つて何かにつけてはれがましく仰山な声を上げる。若い衆子供はそれぞれ揃そろいの浴衣で威勢よく馳け廻る。ワツシヨウワツシヨウワツシヨウと神輿みこしを担かつぐ声はたださえ汗ばんだ町中の大路小路に暑苦しく聞える。こういう時に日ごろ町内から憎まれていたり、祝儀しゅうぎの心附けが少なかったりした家は思わぬ返報しかえしをされるものだった。坂上の屋敷へも鉄棒でガチャンガチャンと地面を打つて脅かす奴を真先に

いずれも酒気を吐いてワツシヨイワツシヨイと神輿を担ぎ込む。

それをば、もう来るころと待つていて若いくらか干祝儀を出すとまたワ

ツシヨウワツシヨウと温和おとなしく引き上げて行くがいつの祭りの時

だったかお隣の大竹さんでは心付けが少ないと言うので神輿の先

棒で板塀を滅茶滅茶めちやめちやに衝き破られたことがあつたのを、わが家も

同じ目に逢わされはしないかと限りなき恐怖をもつて私は玄関の

障子を細目にあけながら乳母の袖の下に隠れて恐々神輿が黒門の

外の明るい町へと引き上げて行くのを覗いたものだった。子供連

もてんでに樽たるみこし神輿を担ぎ廻つて喧嘩の花を咲かせる。揃いの浴

衣に黄色く染めた麻糸に鈴を付けた襷たすきをして、真新しい手拭を向

う鉢はちまき巻にし、白足袋しろたびの足にまでも汗を流してヤツチヨウヤツチ

ヨウと馳け出すと背中の鈴がチャラチャラ鳴った。女中に手を曳ひかれて人込みにおどおどしながら町の片端を平生の服装みなりで賑わいを見物するお屋敷の子は、金ちゃんや清ちゃんの汗みずくになつて飛び廻る姿をどんなに羨ましくも悲しくも見送つたらう。

やがて祭りが終つても柳屋の店先はお祭りの話ばかりだった。

向う横町の樽神輿と衝突した子供たちの功名談ねたを妬ねたましいほど勇

ましいと思つた。若い衆の間に評判される踊り屋台にお鶴が出た

ということは限りなく美しいものに憧あこがれる私の心を喜ばせたと

もに自分がそれを見なかつた口惜しさもいかばかり深いものであ

つたらう。けれども私はすぐさまわが羨望せんぼうの的あてだった絵双紙屋

の店先の滝夜叉姫の一枚絵をお鶴と結びつけてしまった。お鶴の

膝に抱かれながら私は聞いた。

「お鶴さんは踊り屋台に出て何をしたの」

「何だったろう。当てて御覧」

「滝夜叉かい」

「エエなぜ」

「だって滝夜叉が一番いいんだもの」

お鶴は嬉しうれそうに笑ってまた頬擦りをするのだった。真実ほんとにお

鶴が滝夜叉姫になったのかどうか。私の言うままに、良い加減に

そうだと答えたものなのか私は知らないが、古い錦にしきえ絵の滝夜叉

姫と踊り屋台に立ったお鶴とは全く同おんなじ一だったように思われて、

踊り屋台を見なかったにもかかわらず二十年後の今もなお私はま

ざまざと美しい絵にしてそれを幻に見ることが出来る。

土用のうちは海近い南の浜辺で暮した。一時ときとして静まらぬ海の不思議がすでに子供心を奪ってしまつたので私は物欲しい心持を知らずに過ぎた。けれども海岸の防風林にもつれない風が日に日に吹きつり別荘町も淋しくなる八月の末には都へ帰らなければならなかつた。帰つた当座は住み馴れたわが家も何だか物珍しく思われたが夏の緑に常よりも一層暗くなつた室の中に大人のようにぐつたりと昼寝する辛棒も出来ない所以我はまた久しぶりで町をおとずれた。木蔭こかげの少ない町中は瓦屋根にキラキラと残暑が光つて亀裂きれつの出来た往来は通り魔のした後のように時々一人とし

て行人の影を止めないで森閑としてしまう。柳屋の店先に立った私を迎えたのは、店みせ柵だなの陰に白い団扇うちわを手にして坐っていた清ちゃんちやんの姉さん一人だった。

「マアしばらくぶりねえ。どこへ行っていていらしたの。そんなに日に焼けて」

娘はニコニコして私を店に腰掛けさせ団扇あおで※ぎながら話しかけた。

「誰もいないのかい。清ちゃんも」

「エエ。今しがた皆で蝉せみを取るって崖へ行つたようですよ」

「誰も来ないのかなあ」

つまらなそうに私は繰り返して言った。

「誰もって誰さ。アアわかった。坊ちゃんの仲よしのお鶴さんでしよう。坊ちゃんはお鶴さんでなくつちやいけないんだねえ。私ともちつと仲よしにおなりな」

娘は面白そうに笑った。

夕食の後、家内の者は団扇を手に縁端えんばなで涼んでいるうち、こ

つそりと私はまだ明るい町へ抜け出した。早くも燈火ともしびのついた

柳屋の店先にはもう二三人若者が集まっていた。子供たちは私を珍しがっているいろと海辺の話を書ききたがったがそれにも飽きる

と餓鬼大将の金ちゃんを真先に清ちゃんまでも口を揃えて、

「お尻しりの用心御用心」

とお互い同志で着物の裾すそを捲まくり合つてキヤツキヤツと悪戯わるふざけ

を始めたがしまいには止め度がなくなってお使いにやられる通りすがりの見も知らぬ子のお尻を捲つてピチャピチャと平手で叩いて泣かせる、若者は面白づくに喉しかける。私は店先に腰かけて黙つて見ていたが小さな女の子までも同じ憂き目に逢つてワアツと泣いて行くのを可哀そうに思った。

間もなく町は灯になつて見る間にあわただしく日が沈めばどこからともなく暮れ初めて坂の上のほんのり片明りした空に星がチロリチロリと現われて煙草屋の柳に涼しい風の渡る夏の夜となる。

「お尻の用心御用心」

と調子づいた子供の声はますます高くなつてゆく。

「オイオイあすこへ来たのはお鶴ちゃんだろう」

こう言つた若者の一人は清ちゃんの姉さんが止めるのも聞かずに、面白がる仲間にやれやれと言われて子供たちにいいつけた。

「誰でもいいからお鶴ちゃんの着物を捲つたら氷水をおごるぜ」

さすがに金ちゃん姉のこことて承知しなかつたが車屋の鉄公はゲラゲラ笑いながら電信柱の後に隠れる。私は息を殺してお鶴のために胸を波打させた。夜目に際立つて白い浴衣のすらりとした姿をチラチラと店みせ灯りに浮き上らせてお鶴はいつもの通り蓮葉ひよりげたに日和下駄たをカラコロと鳴らしてやって来る。やり過ぎて地びたを這はつて後へ廻つた鉄公の手がお鶴の裾にかかつたかと思つた。紅ひるがえが翻つて高く捲れた着物から真白な脛はぎが見えた。同時に振り返つたお鶴は鉄公の頭をピシャピシャと平手でひっぱたいてクルリ

と踵きびすをかえすと元来た方へカラコロとやがて横町の闇やみに消えてしまつた。氣を呑のまれた若者は白けた顔を見合わせておかしくもな
く笑つた。私は強い味方を持てる氣強さと滝夜叉のように凄すこいほ
ど美しいわがお鶴をたまらなく嬉なつしく懐かしく思つたのであつた
が待ち設けた人に逢われぬ本意なさにまだ崩くずれない集まりを抜け
て歸つた。

暗闇の多い坂上の屋敷町は、私をして若い女や子供が一人で夜
歩きするとどこからか出て来て生き血を吸うという野のぶすま衾の話
を想い起させた。その話をして聞かせた乳母の里でも村一番の美し
い娘が人に逢いたいとして闇夜に家を抜け出して鎮守の森で待つて
いるうちに野衾に血を吸われて冷めなくなつていたそうだ。氷を

踏むような自分の足音が冷え初めた夜の町に冴え渡るのを心細く聞くにつけ野衾が今にも出やしないかとビクビクしながら、一人で夜歩きをしたことをつくづく悔いたのであった。覆いかかった葉柳に蒼澄んだ瓦斯燈がうすぼんやりと照しているわが家の黒門は、固くしまつて扉に打った鉄鉞が魔物のように睨んでいた。私は重い潜戸をどうしてはいることが出来たのだったろう。明るい玄関の格子戸から家の内へ駆け込むと中まの間から飛んで出て来た乳母はしっかりと私を抱き締めた。

「新様あなたはマアどこに今ごろまで遊んでいらつしやつたので
す」

あれほど言っておくのになぜ町へ出るのかと幾度か繰り返して

言い聞かせた後、

「もう二度と町っ子なんかとお遊びになるんじやありません乳母ばあやがお母様に叱られます」

と私の涙を誘うように搔かき口説くので、いつも私が言うことをきかないと「もう乳母は里へ帰ってしまいます」と言うのが真実ほんになりはしないかと思われて知らず知らずホロリとして来たが、

「新次や新次や」

と奥で呼んでいらっしやるお母様のお声の方に私は馳け出して行つた。

お屋敷の子と生まれた悲哀かなしさはしみじみと刻まれた。

「卑しい町の子と遊ぶと、いつの間にか自分も卑しい者になってしまつてお父様のような偉い人にはなれません。これからはお母様の言うことを聞いてお家でお遊びなさい。それでも町の子と遊びたいなら、町の子にしてしまいます」

と言う母の誠めを厳かに聞かされてから私はまた掟の中に囚われていなければならなかつた。しばらくは宅中に玩具箱をひっくり返して、数を尽して並べても「真田三代記」や「甲越軍談」の絵本を幼い手ぶりで彩つても、陰鬱な家の空気は遊びたい盛りの坊ちゃんを長く捕えてはいられない。私はまた雑草をわけ木立の中を犬のように潜つて崖端へ出て見はるかす町々の賑わいはかなく憧憬れる子となつた。

「なぜお屋敷の坊ちゃんやんは町っ子と遊んではいけないのだろう」
 こう自分に尋ねて見たがどうしてもわからなかった。後年、こ
 の時分の、解きがたい謎なぞを抱いだいて青空を流れる雲の行衛ゆくえを見守つ
 た遺瀨やるせない心持が、水のように湧わき出して私は物の哀れを知り初
 めるといふ少年のころに手飼いの金糸雀かなりやの籠かごの戸をあけて折から
 の秋の底までも藍あいを湛たえた青空に二羽の小鳥を放してやったこと
 がある。

崖さに射す日光は日に日に弱つて油を焦がすようだった蟬の音も
 次第に消えて行くと夏もやがて暮れ初めて草土手を吹く風はいと
 ど堪えがたく悲かなしみ哀を誘う。烈はげしかっただけに逝ゆく夏は肉体の疲

れからもかえつて身に沁しみて惜しまれる。木の葉も凋ちようらく落する
寂せきりよう寥の秋が迫るにつれて癒いやしがたき傷手いたでに冷え冷えと風の沁
むように何ともわからないながらも、幼心に行きて帰らぬもの
うら悲しさを私はしみじみと知つたように思われる。こうして秋
を迎えた私ははかなくお鶴と別れなければならなかつた。

ある日私は崖下の子供たちの声に誘われて母の誠いましめを破つて柳
屋の店先の縁台に母よりも懐かしかつたお鶴の膝に抱かれた。

「なぜこのごろはちつとも来なかつたの。私が嫌いやになつたんだよ
憎らしいねえ」

と柔かい頬を寄せ、

「私もう坊ちゃんに嫌われてつまらないから芸者の子になつてし

まうんだ」

と言ったお鶴の言葉はどんなに私を驚かしたろう。遠い下町の、華やかな淫みならな街に売られて行くのを出世のように思つて面白そうに嬉しそうにお鶴の話すのを私はどんなに悲しく聞いたろう。しかしそれも今は忘れようとしても忘れることの出来ない懐かしい思い出となつてしまった。

お鶴はすでに、明日にも、買われて行くべき家に連れて行かれる身であつた。そこは鉄道馬車に乗つて三時間もかかつて行く隅す田川みだの辺りほとで一町内すつかり芸者屋で、芸者の子になるとおいしい物が食べられて、奇麗な着物は着たいほうだい、踊りを踊つたり、三味線を弾ひいたりして毎日賑やかに遊んでいられるのだとお

鶴は言った。

「私もいい芸者になるから坊ちゃんも早く偉い人になって遊びに来ておくれ」

お鶴は明日の日の幸福を確く信じて疑わな顔をして言った。
平生ふだんよりも一層はしやいで苦のない声でよく笑った。

「今度遊びに行つていいかい」

と私が言ったのを、

「子供の癖に芸者が買えるかい」

と囃はやし立てた子供連にまじつてお鶴のはれた声も笑った。そしていつもよりも早く帰えると言ひ出して別れ際に、

「私を忘れちゃ厭いやだよ、きつと偉い人になって遊びに来ておくれ」

と幾たびか頬擦りをしたあげくに野衾のように私の頬を強く強く吸った。「あばよ」と言つて、蓮葉にカラコロと歩いて行く姿が瞭然はつきりと私に残つた。

悄然しょうぜん

と黒門の内に歸つた私は二度とお鶴に逢う時がなかつた。忘れることの出来ないお鶴について私の追想はあまりにしばしば繰り返えされたので、もう幼かつた当時の私の心持をそのままに記すしることは出来ないであろう。私は長じた後の日に彩つた記憶だと知りながら、お鶴に別れた夕暮の私を懐かしいものとして忘れない。

「お鶴は行つてしまふのだ」

と思うと眼が霞かすんで何にも見えなくなつて、今までにお鶴がさ

さやいた断れ断れの言葉や、まだ残っている頬擦りや接吻の温
 かさ柔かさもすべて涙の中に溶けて行つて私に残るものは悲哀
 ばかりかと思われる。堪えようとしても浮ぶ涙を紛らすために庭
 へ出て崖端に立つた。「お鶴の家はどこだろう」傾く日ざしがわ
 ずかに残る、一様に黒い長屋造りの場末の町とてどうしてそれが
 見分けられよう。悲哀に満ちた胸を抱いてほしいままに町へも出
 られない掟と誠めとに縛られるお屋敷の子は明日にもお鶴が売ら
 れて行く遠い下町に限りも知らず懂がれた。「子供には買えない
 という芸者になるお鶴と一日も早く大人になつて遊びたい」
 見る見る落日の薄明も名残りなく消えて行けば、
 「蛙が鳴いたから帰えろ帰えろ」

かえる

うすらあかり

なご

と子供の声も黄昏たそがれて水底みなそこのように初秋の夕霧が流れ渡る町々にチラチラと灯ともがともるとどこかで三味線の音が微かすかに聞え出した。ポツンポツンと絶え絶えに崖の上までも通う音色を私はどうしてもお鶴が弾くのだと思わないではいられなかった。そして何だかその絃いとに身も魂も誘われて行くようにいとせめて遣瀨ない思いが小さな胸むねに充いっぱい分ぶんになった。「お鶴は行ってしまふのだ」「一人ぼっちになつてしまふのだ」とうら悲しさに迫り来る夜の闇の中に泣き濡ぬれて立っていた。

ふと私は木立を越した家の方で「新様新様」と呼ぶ女中の声に気がつくと始めて闇に取り巻かれうなだれて佇たたずむ自分を見出して夜の恐怖に襲われた。息も出来ないで夢中に木立を抜けた私は縁

側から座敷へ馳け上ると突然^{いきなり}端近に坐つていた母の懐^{ふところ}にひしと縋^{すが}つて声も惜しまずに泣いた。涙が尽きるまで泣いた。

ああ思い出の懐かしさよ。大人になつて、偉い人になつて、遊びに行くと誓つた私はお屋敷の子の悲哀^{かなしみ}を抱いて掟^{おきて}られ縛^{いまし}められわずかに過ぎし日を顧みて慰むのみである。お鶴はどこにいるのか知らないが過ぎし日のはかなき美しき追想に私はお鶴に別れた夕暮、母の懐に縋つて涙を流した心持をば、悲しくも懐かしくも嬉しき思い出として二十歳^{はたち}の今日もしみじみと味わうことが出来るのである。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 78 名作集（二）」中央公論社

1970（昭和45）年8月5日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

山の手の子

水上滝太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>